

研究分野のキーワード：言語学、文法、カパンパンガン語、フィリピンの言語、世界の言語

研究紹介

大学で出会った「言語学」にとりつかれ、これを一生の仕事とすることに決めました。まだ飽きずにやっています。楽しいことをしながらそれで食べている、これほど幸せなことはありません。言語学者にはいろいろな仕事がありますが、その一つが「文法の解明」です。

皆さんにとって文法とは、授業や本を通じて身につけるものでしょう。「英文法」や「国文法」は、参考書に詳しく書かれています。つまり、文法は最初から皆さんの目の前に与えられています。それを忠実に学習することで、言語がマスターできるわけです。

しかし、言語学者にとって文法とは、発見するものなのです。文法は、話者の頭の中にあります。しかし、日本語であれ英語であれ、その言語の話者は誰でも、文法など意識せずに自然に話しています。その無意識の文法を、話者の頭の中から無理やり引っ張り出すのが、言語学者の仕事です。

私が言語学者としてやっていることの一つは、フィリピンで話されている言語の一つ、カパンパンガン語（Kapampangan）という言語の調査です。フィリピンに出かけていき、ネイティブスピーカーの調査協力者とともに文法の仕組みを掘り起こしていく地味な作業をしています。

自然な会話を録音し、その後、協力者と録音を聴きながら、会話を文字化したり、英語に翻訳します。また、録音を聴くだけでなく、協力者にいろいろな質問をします。例えば「『あなたは誰にこれを作らせたか？』はどう言いますか？」などと聞いて、文を作ってもらいわけです。作った文の時制を変えたり、主語を変えたりして、文例を集めていきます。このような作業を通じて、文法を解明していくのです。このようにして集めたたくさんのカパンパンガン語の例を分析したものが「文法」になるわけです。

ただ、どの言語でも完璧な文法書はありません。日本語や英語でも、まだまだ文法でわからないことがたくさんあります。ただ、メジャーな言語であれば、数え切れないほどの立派な文法書や辞書が、そして何よりその言語を流暢にあやつれる大勢の言語学者がいます。しかし、あまり研究されていないマイナーな言語だと、このどれもが不足しています。カパンパンガン語は百万人以上は話し手がいると思われますので、世界でもメジャーな言語の一つですが、研究資料や研究者は大変少ないのです。私はいつかはカパンパンガン語の文法書をまとめてみたいと考えています。

もし言語学が面白そうと思ってもらえたら、言語学者の仕事がちょっとわかる読み物を三冊紹介します。どれも胸躍る冒険の物語です。ぜひ読んでみて下さい。

青木晴夫『滅びゆくことばを追って：インディアン文化への挽歌』、小島剛一『トルコのもう一つの顔』、ダニエル・L・エヴェレット『ピダハン：「言語本能」を超える文化と世界観』